

地域の記憶をグローバルにつなげるゲートとしてのアート

青梅市新庁舎は、その敷地の地形的、歴史的な背景を尊重した建築である。多摩川の河岸段丘から丘状に連なる地形的な特性や、貴重な地域資源であった材木や漆喰などに配慮して表現された。

アートワークはその地域の原風景や都市のもつ新たなアイデンティティを表現し発信する有効な装置。また建築や周囲の景観と調和し、訪れる市民にとっても、勤務するユーザーにとってもフレンドリーな環境を提供することが可能である。

市庁舎前の広場は駅方面からのアプローチとして憩いの空間となる。そこに市庁舎へのゲート、そして緑陰の憩いの空間という機能をもちながら、姉妹都市との長年の交流を物語るぶどう棚とベンチを設置した。青梅市の姉妹都市ドイツのポツパルトはワインの産地として有名で、そこから寄贈された苗のためのブドウ棚である。アーティストは地元在住の青木野枝氏に依頼、鉄を使いながら柔らかく軽やかな作品が完成した。

完成と同時に終わりではない、時間の経過にともない育ってゆき、市民を心地よく迎え入れ、グローバルにも発信できるアートワークとなっている。